

抄録

結核性自發性氣胸ニ就テ

ゲオルグ、バルト

(Zeitschr. f. Tub. Btl. 37. Heft 5. 1923)

肺結核患者ニ自發性氣胸ノ合併シ來ルハ勿論重篤ノ事象ナレドモ、注意深キ觀察ト合法ノ處置トニヨリテ、急ヲ救ヒ得ルコト稀ニマラズ、翼瓣氣胸 (Ventilpneumothorax) ノ際ハ多クハ心臟ノ壓排現象烈シキ爲ニ豫後不良ナリ、又開口性氣胸ガ長期間存在スルトキハ空洞ヨリ胸膜腔ヲ汚染スルノ危険アル故亦不良ナリ、最モ好都合ナルハ單純ナル閉鎖性氣胸ニシテ往々迅速ニ空洞壁ノ癒著ヲ來シ、空氣ハ再び吸收セラレ、浸出液亦微量ニ止マリ、同側ノ肺ハ安靜ニ保タル、ノ結果原症タル肺結核ノ著シキ輕快ヲ來タスコトアリ。

(遠藤)

肺結核ノ安靜療法ニ對スル生理學的補助

エス、アー、クノッブ

(Zeitschr. f. Tub. Btl. 37. Heft 5. 1923)

デットワイレル氏ガ戶外安臥療法ヲ提唱シテ以來、其效果ハ漸次一般ノ認ムル所トナリシガ、其後全身の安靜ノミナラズ患部其物ノ安靜ヲ必要トナスノ説起リ、特種ノ繃帶又ハ絆創膏繃帶等ヲ以テ患側胸部ヲ壓迫シ、又ハ肋骨切除、氣胸療法等ニヨリ罹患肺臟ノ呼吸運動ヲ制限セントスル諸法ノ行ハル、ニ至レリ。

而シテ著者ハ呼吸法ノ改良ニヨリテモ同一ノ目的ヲ達シ得ルコトヲ唱導シ、其方法頗ル簡單ニシテ應用ノ廣キコトヲ特長トナセリ。

其後ハ呼吸運動ヲ唯胸廓下部ニ限り主トシテ橫隔膜呼吸ヲ行ヒ、且又呼吸ヲ緩徐ニシテ其回数ヲ減少セシムルニアリ、斯クテ肺ノ罹患部ニハ炭酸瓦斯ノ蓄積ヲ來シ、之ニ反シ健康部ニテハ完全ナル換氣行ハル、ナリ。而シテ局所ニ於ケル炭酸瓦斯ノ滯留ハウエーベル、コルバー、ガウス、レンシュ諸氏ノ主張セル如ク結核症ノ進行ヲ阻止スルノ作用ア

リ、尙呼吸數ハ意志ヲ以テ減少セシムルコト困難ナラズ、
モーリス、ブルゴア氏ニヨレバ飛行家適任者ハ何レモ四十
乃至四十五秒間呼吸ヲ止メ得ルモノニシテ或人ノ如キハ六
十五秒間止メ得ル者ナリキ。

又一分間二十回ノ呼吸ヲ十回ニナシタリトセバ五時間ニハ
三千回ノ呼吸運動ヲ節約シ同時ニ心臟搏動數モ幾分減少ス
ル爲ニ其「エチルギー」モ節約セラレベク、且又横隔膜呼吸
ハ腹部臓器及下肢ノ血行ヲ可良ナラシムルノ利益アル故靜
臥中ノ患者ニハ特ニ必要ナリ。

實行法トシテ、患者ヲ先ヅ仰臥セシメ、指導者ハ其前ニ立
チテ己ノ手指ヲ見サシメ、指ヲ舉グルヲ合圖ニ吸氣ヲナサ
シメ、指ヲ水平ニ保ツ間呼吸ヲ停止セシメ(二乃至五秒間)
指ヲ下スニツレテ呼氣ヲナサシム、而シテ吸氣ハ先ヅ右足
趾端ヨリ初メ横隔膜迄上リ、夫ヨリ左足ヲ降り、左ノ趾端
ニ終ル如キ觀念ヲ以テナサシムルヲ可トス、尙初心ノ者ハ
胸式呼吸ヲ制限スル程度ヲ知り易カラシム爲ニ胸部ニ緩キ縋
帶ヲ施シテ練習スルヲ可トス。

斯クノ如クシテ咳嗽、喀痰、發熱等ヲ著シク減ジ得タル實
例アリ。

此方法ノ適セザルハ、此爲ニ胸痛ヲ起シ若シクハ從來存ス

ル胸痛ノ増進スル場合及病變ガ下葉ヨリ初マレルトキ又ハ
病變ガ著シク下葉ニ擴ガレルトキ等ナリ。(遠藤)

結核診斷上血清ノ補體結合試驗

エフ、キーストフェルト、エー、ワイゲルト

(Centralbl. f. Bakt. Orig. teil. Bd. 90, 1923)

一九一三年ベスレドカ氏ガ卵黃水培養ニ成功シ後チ一九二
一年本培養ノ人型菌ヲ百十度ニ二十分間滅菌シタル後濾過
シタル即チ「オパール」溷濁ヲ呈シタル免疫元ヲ用ヒテ微毒
ノワ氏反應ト均シキベ氏反應ヲナサレタリ著者ハ臨牀の方
面ト本血清學的方面ノ對照實驗ヲ重キタリ即チ肺炎加答
兒、肺結核、結核ノ疑ヒアル者微毒患者等ノ血清ニツキ
多數ノ補體結合反應結核菌發育防止試驗ヲ試ミタルモ餘
リ確實ノ成績ニ非ラズ今補體結合反應ノ成績ヲ概括スレバ
ベスレドカ氏卵黃水培養基ニハ好ク發育ス或ル人型結核菌
株ヲ以テ補體結合反應ガ出來ル免疫元ノ價置ハ實驗ヲナシ
タル時ノ補體量ニ關與ス若シ對照トシテ菌ヲ培養セザル液
ヲ免疫元トシタルトキハ非特異性ニ現ハレルコトアリ臨牀
的觀察ト比較シテ七五%陽性内七〇%ト云フモノハ類症鑑
別ヲナシ得タリ。

結核ノ早期ニハ比較的屢々血清反應陰性ナリ其レ故ニ本反應ノ實地の診斷的意義ハ制減セラル又タワ氏陽性ナル微毒患者血清ハ結核ヲ有セザルモ多少強ク陽性ニ表ハレル。

(渡邊)

「モルモット」肺結核結節ニ對スル消化液ノ影響

エー、フェルバツハ及ビジー、ルクエス

(C. r. Acad. des Sciences. 1922 174)

牛結核ニ感染シタル「モルモット」肺臓ノ結核結節ヲ人工胃液ニ五十二度ニ十五分處置スルト試驗動物ニ對シ全ク無毒トナル。

(渡邊)

結核性腦膜炎ノ徵候學ニ就テ

アー、ウイ、フリシユ

(Wiener klinische Wochenschrift. Nr. 9. 1922)

著者ハ本病例ヲ記載シ臨牀的症狀又ハ結核過敏反應ヲ應用シ診斷的意義ヲ的確ニシタリ。

(西濱)

抄録

皮膚結核ノ「レントゲン」療法

リカード、ウオルク

(同誌 Nr. 3)

皮膚結核ニ「レントゲン」光線療法ノ合理的ナルコト、其ノ實驗例ヲ述ベ凡テノ皮膚結核ニ對シ經過ヲ良好ニシ凡テノ治癒機轉ヲ誘致スルモノナリ。

(西濱)

余ノ結核治療法

ペー、アンドレチー

(同誌)

著者特有ノ考ヲ以テ結核患者ニ實驗的考察ヲ述ベタルモ主トシテ體溫下降ヲ以テシタリ。

(西濱)

結核菌ノ液體培養基中ニ於ケル發育ニ就テ

エドワルド、ハツケル

(Zeitschr. f. Hygiene u. Infektionskr. Bd. 99. H. 2. 1923)

ベスレドカ氏ノ「アルカリ」卵黃水培養基ニ結核菌ヲ移スト管底ニ沈ミ發育スルコトヲ實驗シ「グリセリン」肉汁ニ卵黃

七六九

ヲ加ヘ弱酸性トシタルモノ又ハ家兔肝臟ヲ以テ製シタル培養基ニ於テモ亦タ均シ故ニ是レハ「リポイド」ニ關與スルモノナリト而シテ他ノモノト比較スルニベスレドカ氏法優レルコトヲ知り著者ハ之ヲ改良シタリ又タ二期三期結核患者ノ血液一坵宛ヲ培養シタルニ永ラクシテモ結核菌ヲ證明シ得ズ尙ホ著者ハ結核感染ガ徐々ニ進行スルコトヲ此ノ試験管内徐々發育ニ比スベキモノト云ヘリ

(渡邊)

抗酸性菌鑑別培養實驗

ハー、シュロスベルゲル、エル、ブリッケ

(同誌)

著者等ハ結核菌及非結核抗酸性菌十六種多數株ニ對シ糖、昇汞、「クロラルゴール」銅、竝ニ色素類等十二種ノ化學品ヲ以テ培養基ハ「グリセリン」肉汁ヲ用ヒ發育妨止現象ヲ試ミタルニ眞ノ溫血動物結核菌ハ非病原性結核菌ヨリ化學品ニ對シ一般ニ過敏ナリ化學品ニ對スル過敏ト動物病原性トハ一致ス而シテ眞ノ結核ト非病原性菌トノ鑑別ハ常ニコノ方法ヲ以テハ達セズ即チ多數菌株ノ内ニハ動物試驗ナリ培養上ナリ其ノ中間型ヲ見出スコト多シ。

(渡邊)

牛腎臟ノ結核性變化

クラウスセン

(Zeitschr. f. Infect. Haustiere Bd 24 H 2 1922)

古來牛腎臟ノ結核變化ハ栓塞、粟粒結核ニ於テ認メラレル故著者ハ牛ノ靜脈内ニ牛型菌ヲ注射シ細菌學的病理組織學的ニ開放性竝ニ閉鎖性腎臟結核ノ變化ヲ攻究シタルコト血管ヲ介シ腎臟ニ達シタル菌ニ依テ高度ノ變化ヲ起スコトハ稀ニシテ唯腎臟組織中ノ血管ニ變化ヲ與ヘ腎臟質ノ間細胞若クハ絲絨體內ニ結核菌ヲ認メル結核像ヲ呈シタリ閉鎖性結核像ニハ結核菌ヲ有スル巨大細胞アリ組織内ニ存スル病竈ハ總輸尿管ヲ破リテ開放性トナル而シテ輸尿管内ニハ巨大細胞、喰菌細胞竝ニ遊離結核菌アリ遂ニ尿ニ依リテ膀胱内ニ送り出サル故ニカルリナ氏ノ牛結核豫防上腎臟結核ニ注意ス可シト云フ提唱ハ適切ナリ。

(渡邊)

馬血清ニテ結核特殊反應ノ一新方法

サンマルチノ

(Zeitschr. f. Immunitätsforsch. Orig. teil Bd 35 H 5/6 1922.)

結核特殊反應ハ一八九〇年コッホ氏舊「ツベルクリン」〇〇一耗ヲ皮下ニ注射シ爾來メルレル、レーウエンスタイン、オストロウイスキー氏等微量注射ノ診斷的價置ヲ論及シピルケー皮膚反應、マントウクス氏ノ皮内反應、ウォルフ、アイス子ル、カルメット氏眼反應モーロー氏ノ皮膚反應等アリ何レモ「ツベルクリン」ヲ使用シタルガブサツカ氏ハ結核患者ハ馬血清ニ對シ過敏ニシテ非結核ハ然ラザル故診斷ニ應用シ得ルト唱ヘタリ今馬血清ノ〇〇二耗ヲ皮下ニ注射スルト結核患者ハ二十四時間内ニ著シキ局所反應ヲ呈スルガ全身反應全クナシフインケル氏ハウインニ於テ皮膚結核ニ試ミ八七%ノ陽性率ヲ得以テ活動性結核ノ證明ニナルト云ヒ唯例外トシテ馬肉食者ハ反應スベスレドカ氏ハ馬血清ノ反應ハ一ノ「アナフィラキシー」反應ニテ眼反應ニハ稱用シ難シト云フモ著者ハ健常馬血清ヲ眼結膜囊内ニ入レシニ局所竝ニ全身反應ヲ起シタリ故ニ動物九頭ヲ先ヅ「ツベルクリン」ニテ處置シ實驗シタルニ陽性六例陰性二例不明一例アリ健常「モルモット」ハ時トシテ陽性ニ反應スル故結核診斷上要件ナクシテ目的ヲ達セズ。

(渡邊)

諸種冷血動物結核菌ノ免疫元作用ニ就テ

(「ツベルクリン」反應上組織ノ特殊反應認識)

セルマ、マイエル

(Zeitschr. f. Hyg. infect., Bd 97 II 3/4 1923)

著者ハフリードマン結核菌ガ人型菌ト無關係ニ非ラザル考ニテ特殊組織反應能力ヲ小兒竝ニ多數ノ「モルモット」ニ就キ皮内反應ニテ檢査シタルニ龜、蛇、魚、(u Trompette) 結核菌ハ溢血動物臟器ニ變化ヲ來シ該動物ハ前處置ヲ施シタル同種菌株「ツベルクリン」ニ依テ反應ヲ惹起サレ異種「ツベルクリン」生理的食鹽水、血清、乳、ニテハ反應サレズ又タ人體ヲ一種ノ冷血動物結核菌ニテ處置スルト人型菌「ツベルクリン」ニ依テ反應ヲ呈スルモ該反應ハ性質上區別シ得例之バ魚結核菌前處置シタル者ノ反應ハ平坦ニ赤ク龜結核菌前處置シタル者ハ結核患者ト均シク強ク溼潤ヲ呈ス而シテ冷血動物結核菌中龜及ビ Trompeten 菌ハ人型菌ニ類似シ皮膚反應常ニ相互移行惹起セラル又タ結核兒及ビ人工感染「モルモット」ハ凡テノ「ツベルクリン」ニ對シ反應陽性ナリ以テフリードマンノ結核菌ハ人型菌類似者ト謂フ可シ

而シテ強キ組織反應能力ハ人型菌ニ於テ認メラルト結論サレタリ。

(渡邊)

譯者曰ク同氏ハ或ル冷血動物結核菌デ免疫スルト其菌株デ作ツタ「ニ」ニハ反應スルガ他ノ「ニ」デハ反應シナイ。唯龜菌ヤ Trompeten 菌ハ人型菌トノ間ニ相互ニ反應ガアルカラ龜ノ菌即チフリードマン結核菌ハ人型菌ノ變種デアルト云ヒタイガ人結核ニ實驗シタトコロドノ菌株「ニ」モ反應シタノデ皮膚反應ハ比較的デアルト云ヒ實驗ハドウデモコウデモ自分ノ考ヘ通りニ結論ヲ以テキタノカモシレナイ。

餌食、吸入ニ依ル肺結核發生ノ實驗的研究

バウムガルテン

(同誌)

餌食實驗ニ依テ結核菌ハ消化器ノ上部ノ粘膜即チ口咽頭ノ粘膜ヨリ淋巴道ヲ介シ吸入シタル菌ハ上氣道粘膜ヨリ淋巴道ヲ介シテ血管ニ入り肺ニ達スルコトヲ多數ノ「モルモット」及ビ家兎ニ就テ實驗サレタリ又タ「モルモット」ノ六七%ハ吸入ニ依テ全ク肺ニ變化ヲ證明シタリコ、ニ於テ結核豫防上 Tropfen infektion ノ意義ガ存スルト云ヘリ。

口、眼結膜感染ヲ以テ頸腺結核ノ實驗

附 其他臟器殊ニ肺臟ノ發病關係

ヨース、コッホ及ビバウムガルテン

(同誌)

結核菌乳劑ヲ家兎、「モルモット」ノ口腔内ニ入レルト頸腺結核、肺結核ヲ起ス此頸腺結核ハ人間ト好ク一致ス斯ク肺及頸腺ニ病的變化ガ證明サレルニ拘ハラズ菌ハ消化器ノ上部ヨリ漸次消滅ス又一部ハ口咽粘膜ヨリ吸收サル此吸收サレタル菌ハ淋巴道ヲ經テ頸腺ニ達シ又タ靜脈ヲ介シテ右心ニ至リ肺ニ達ス、口咽ノ表皮ヨリ直接ニ頸部淋巴腺淋巴道ヲ經テ氣管枝腺ニ入ルコトナシ是レ兩者ノ結合淋巴道ナシ、實驗的頸腺結核ハ人ノ頸腺結核及ビ腺病ト同様ナリ消化器上部口咽ハ菌ノ染入門戸ノ機轉トナル即チ菌ガ粘膜面ニ存在スルコト短時間ナリト雖モ吸收サレ得ル機會ヲ有スル故ナリ次ニ眼結膜ガ結核菌ニ冒サレテモ頸腺結核ニ次デ續發的肺感染ヲ起ス眼結膜ニ屢々病原菌ノ存在スルコトハ吾人ノ經驗上明白ナリ故ニ結核ノ感染機會モ又タ存在ストハ云ハザル可カラズ。

今微量ノ結核菌ガ眼結膜ニ入ルトキハ認ム可キ頸腺ノ變化
ナクシテ該腺ヲ通過シ肺毛細管ノ内皮細胞ニ至リ定型性ノ
結核結節ヲ作ル故ニ結膜ノ結核菌ニ汚染サレルコトニ由テ
菌ノ餌食吸入ナクシテ特發肺結核ヲ惹起シ得ルト云ヘリ。

(渡邊)

譯者曰ク

本論旨ハ常例トスルニ足ラズ斯ル場合ハ普通有リ得可カ
ラザルコト、信ズ即チ菌ガ侵入シテ淋巴腺ニ變化ナクシ
テ通過スルコトガ健常ノ場合少ナクトモ動物實驗上證明
シ難シ。

口腔感染及ビ吸入ニ依ル肺結核發生

ニ就テヨース、コッホ及ビバウムガル

テンノ作業ニ注意ス

フリューケ

(同誌)

ヨース、コッホ、バウムガルテン氏ハ余及ビ余等ノ業績ヨリ
口咽粘膜ヨリ結核菌侵入スルコトハ僅カニ注意ス可シト引
用サレタルモ余ハ斯ク論述セズ本誌(Zeitschr. f. Hyg.)三十
八卷ニ記述シタル如ク咳嗽飛沫ノ結核菌ハ口咽粘膜ニ損傷

及ビ變化ヲ起サズニ扁桃腺及他ノ粘膜ヨリ侵入シ頸腺結核
ヲ生ズルト云ヒコッホ、バウムガルテン氏ハ又タ菌吸入ニ
由テ直接ニ肺ニ達シ病變ヲ呈スルコトヲ珍ラシク論ゼラレ
タレドモ余等及ビ其他多數ノ學者ハ既ニ證明シ居レリト云
ヒ諸種ノ實驗ヲ綜合シテ結核ノ飛沫感染ノ實驗ハ「モル
モット」ハ人間ヨリ困難ナリト結論シ。

又タコッホ、バウムガルテン說ノ肺結核ノ發生ニ就テ常ニ
菌ガ眼結膜及ビ口咽ノ二ヶ所ヨリ侵入スルモノトスルハ正
シカラズ此ノ眼結膜感染ハ衛生上ノ立場ヨリシテ重要視ス
ル能ハズ例令少量ノ菌(腺ニ變化ヲ起サル程度ノ)ガ肺ニ
入りテモ變化ヲ起スニ足ラズ又タ大量ノ菌ガ唯一回入りテ
モ肺患ノナキモノニハ作用スルヤ否ヤ疑ハシ其レヨリ重要
視スルコトハ結核ノ自然的感染ハ屢々反復シテ或ハ強ク或
ハ僅カニ飛沫菌ヲ吸入スルニアリ而シテ結核ノ傳染方法ハ
他ノ何モノヨリモ唯呼吸ニ由テ患者ノ咳嗽飛沫ヲ吸入スル
ニアリト云ヘリ。

(渡邊)

後天性結核免疫ノ研究

ハー、ゼルター

(Zeitschr. f. Hyg. u. Infect. Bd. 98 1923)

志賀、カルメット等ノ結核免疫方法ヤ一九二二年 *Hygiene* ニ論述シタ自己所見ヲ引用シ實驗成績上ヨリ結核免疫ノ實驗ハ最モ困難ニシテ古來ヨリノ學說即チ結核免疫ハ感染後生ズルモノナリトノ說ハ合理的ナリト陳述シタリ。氏ハ接種菌ノ生存スル期間免疫上有意義ナル故生菌注射ニ由テ免疫ヲ惹起シ二次的感染ヲ防止ス而シテ免疫力ハ充分ノ菌力ヲ保有スルヲ必要トスルガ實地應用出來ザルハ明カナリ故ニ弱毒人型菌又ハカルメット氏ノ如ク牛型菌ノ必要ガ起ル之レ大部分ハ生結核菌體ノ「プロトプラスマ」即チ「アグレアシン」ノ作用ト尙ホ他ノ一部ハ生活菌ノ作用ニ由リテ免疫セラル今牛型菌免疫材料ヲ以テ前處置シタル「モルモット」ハ致死量ノ人型菌ニ對シテ感染防止力ヲ有ス「モルモット」ノ多數ニ就キ實驗シタ成績ハ生菌注射後十乃至十五日ヨリ免疫力ヲ認ムルモ二十日後ニハ確實ニ證明シタリ又タ第一ニ強ク感染セシメタトキハ五日後ヨリ免疫力現ハレ十乃至十五日後ニハ明カニ證明ス。(渡邊)

羊ニ就テ被働性結核免疫ノ實驗

エフ、ノイフェル、ブルノー、ランゲ

(同誌)

パウムガルテン、デイベルト、レーメル等ハ結核被働性免疫ノ陰性ナルコトハ異種蛋白排出速カナルニ基クナラントテパウムガルテン氏等ハ牛免疫血清ヲ牛ニレーメル氏ハ羊免疫血清ヲ羊ニ實驗シ前者ハ多少疑問點ヲ保留シテ一部成效シタリト報告シテ曰ク實驗牛五頭中二頭ハ結核ヲ免カレ一頭ハ普通ノ結核二頭ハ慢性結核ヲ呈シタリ後者ハ實驗羊二頭中一頭ハ對照ニ比シ輕キ結核變化一頭ハ免カレタリト報ズ氏ハ是等ノ複試ヲ體重二〇乃至二八斤ノ羊ニ四乃至十二週培養ノ菌〇・〇五乃至〇・五疋ヲ注射シ感染程度ヲ以テ免疫力ヲ測リタルニ免疫血清ヲ注射シタ羊モ然ラザル對照羊ト均シクシテ區別スル點ヲ見出サズトテ結核ノ被働性免疫實驗ヲ否定シタリ。(渡邊)

白鼠ニ結核ノ實驗的研究

ブルノー、ランゲ

(同誌)

著者ハ白鼠ヲ用ヒ二ツノ實驗ヲナシタリ第一ハ「ツベルクリン」過敏現象第二ハ結核菌型區分。第一ノ問題ハ體重十瓦ノ「マウス」腹腔内ニ菌一疋ヲ注射シテ「ツベルクリン」ニ對スル定型性過敏現象ノ發生能力ヲ認

メタルモ確實ナラズ第二ノ問題ハ人型菌、牛型菌ヲ以テシタリ之ニ就テハトロンムスドルフ (Arb. a. d. Kais. Gesuntheitsamt 32 568 1909) 氏ハ人型結核菌一砵ヲ「マウス」靜脈内ニ注射シ一乃至二週ノ間ニ死シタル「マウス」ハ肉眼の僅ニ脾臓ノ腫大僅カノ病的變化ヲ認メ三四週間ニテ死シタ「マウス」ハ肺臓ニ僅カノ變化ヲ呈シタルモ一砵ノ牛型菌注射ノ場合ハ一週間後既ニ肺臓ニ著明ノ變化ヲ呈シ四週間後ニハ各臓器ニ著シキ結核變化ヲ認メ以テ此ノ兩型ヲ區別シ得ルト云フ氏ハ本實驗ヲ復試シテ曰ク人牛型菌ヲ同一條件ノ元ニ白鼠ノ靜脈内ニ注射シタルニ二型ヲ定ムル能ハズト結論シタリ。

(渡邊)

動物通過ニ依ル非病原性抗酸性菌ノ菌力増進問題

ワルテル、ストラウス

(同誌)

二年前ニ發表サレタコルレ、シユロースベルゲル、プファンテンスチール氏ノ實驗即チ非病原性菌(「チモテー」、「バタ」、「冷血動物抗酸性菌」)ガ温血動物ヲ通過シ菌力増進シ人型菌ト區別出來ザル程度トナルト云フ復試ヲナシテ曰ク僅

抄録

カノ實驗上結斷スルニ非ラザルモ大ニ注目ヲ要スル點ハ注射シタル非病原性抗酸性菌ト偶然ノ二次的感染(殊ニ人牛型菌ヲ實驗シ居ル場合ニ於テ)菌トヲ考ヘザル可カラズト云ヘリ。

(渡邊)

「モルモット」體內ニ於テ認ムル「一」 ノ所謂抗酸性菌ノ關係

アー、コルフ、ペテルソン

(同誌)

「チモテー」、「バタ」菌竝ニ人型菌ヲ「モルモット」腹腔内ニ注射シタルニ抗酸性菌ハ病原性ヲ區別スルコトナク白血球ヲ多ク誘致シ且ツ喰セラル「チモテー」菌ノ抗酸性ハ培養關係ニヨリテ消失シ「モルモット」腹腔内ニ注射スルト四五時間後ニ抗酸性力ヲ有スルニ至ル菌ノ抗酸性ハ「プロトブラスマ」ノ生活力ノ證明ニ足ル。

(渡邊)

人型牛型菌感染ノ皮膚結核蔓延

エム、キルヒ子ル

(S417 481)

「ルーブス」ノ詳細ナル統計ニ自己ノ實驗ヲ加ヘテ小兒五歲

七七五

以下ニハ人型菌多ク各年ヲ通算シテ調査スルト人型モ牛型モ殆ド伯仲スルガ人型菌ノ方稍々多シ。(渡邊)

結核純培養ニ對スル消毒劑ノ作用

ペト、ウーレンフト、エト、ハイレル

(同誌)

結核菌ハ「リポイド」、「ワックス」ノ爲メ消毒藥ノ作用ヲ受ケルコト比較的弱シ今結核菌ノ純培養ニ種々ノ消毒藥ヲ作用シテ培養又ハ動物實驗上其ノ成績ハ大略左ノ如シ。

消毒藥種類

殺菌時間

- 一%石炭酸 一五〇分(二〇分ニテハ殺菌力ナシ)
- 一・五%石炭酸 四五分(三〇分ニテハ殺菌力ナシ)
- 二%石炭酸 五分
- 〇・五%「クレゾール」 六〇分
- 一乃至一・五%「クレゾール」 一五分(「アルカリ」液等「分ノモノ」ハ殺菌力減シ一%ニテ要ス 四十五分ヲ)
- 〇・五%「リゾール」 一八〇乃至二〇〇分(「クレゾール」石鹼ナリ)
- 二%「リゾール」 三〇分
- 〇・三%「クロールメタン」 一五分
- 〇・三%「クレゾール」 一五分

- 〇・二%「クロールメタン」 三〇分
- 〇・四%「クロールメタン」ニ $\frac{1}{2}$ 容ノ「アルカリ」ヲ加ヘ〇・二%遊離シタルモノハ

一%「フォルマリン」水

二%「フォルマリン」水

〇・一%昇汞水

〇・五%昇汞水

二%「クロールアミン」

二%「クロールアミン」

二%「クロールアミン」

以上ノ實驗ニ於テ結核菌ハ石炭酸殊ニ「クレゾール」ニ對シテハ「スタヒロコッケン」ヨリ殺菌サレ易シ之ニ反シ「フォルマリン」昇汞「クロールアミン」ハ殺菌サレ難シ殺菌作用強キ「クレゾール」ニ石鹼ヲ加ヘルト組織中ニ於テ僅カニ殺菌作用ヲ呈シ其ノ程度常ナラズ「フォルマリン」等ニ石鹼ヲ加フルト脾脫疽菌化膿球菌ノ殺菌力増進セザル如ク結核菌ニ對シテモ殺菌力増進セズ。

三〇分(「アルカリ」結合ハ殺菌力證明セズ)

一二〇分ニテ殺スモノ一八〇分ニテ殺サヌモノアリ

六〇分ニテ殺スモノ一二〇分ニテ殺サヌモノアリ

三〇乃至六〇分又ハ一時間以上ヲ要ス

一五乃至六〇分又ハ二時間ニテ殺スコトアリ

三時間デモ殺サヌ(而シ「スタヒロコッケン」ニハ殺菌作用強シ)

〇・一%液ニテ短時間内ニ殺ス)等量ノ醋酸ヲ加ヘシモノハ一時間殺菌力ナシ

ニ第一磷酸曹達ヲ加ヘルト二時間(而シ三時間デ殺サヌコトモアリ一定セズ)